



完堕ち済みのコッコロが美食殿の仲間を墮とす話

ユメジダケ

「今日も手掛かりなし、ですか……コッコロちゃん、いったいどこに行ってしまったんでしょうか……？」

わからない——隣を歩く騎士の少年、ユウキがそう答えるのを聞いて、ペコリーヌは改めて溜息をついた。その顔には普段快活な彼女らしくない憂鬱な感情が色濃く滲んでいる。

ペコリーヌとユウキが所属するギルド美食殿の一員であり、ユウキの従者を名乗るエルフの少女コッコロが突如行方不明となつてはや一か月。ギルドメンバーによる必死の搜索が行われ、ユウキがその広い人脈を使って他のギルドにも協力を呼びかけたりもしたが、足取りは依然として知れぬまま。この手の事件に造詣が深い自警団に所属する探偵の少女もそれは変わらないようで、親愛する少年の役に立てないことに歯痒い表情を浮かべていた。

「ユイちゃんの方も……見つからないみたいですし」

行方不明となつたのはコッコロだけではない。トウインクルウィッシュに所属する少女ユイもまたコッコロと同じ日に行方を眩ませている。

二人の真面目な性格を考えれば、親しい仲間にも何も告げることなく一月もいなくなるなどまずありえない。自分たちの意思で失踪したのではなく何らかの事件に巻き込まれたと考えるのが妥当だろう。

だがユイとコッコロはどちらもランドソルでも有数の実力者。ユウキのプリンセスナイトの力がなくともそこいらのごろつき程度では相手にもならない。

その二人をなんの証拠も残さずに連れ去ることなどできるとしたら、余程の実力を持つ相手かあるいは人質や魔道具を用いる狡猾な相手か……。

いや、そもそも連れ去られたという考え自体が希望的観測なのかもしれない。
もしかしたらもう二人とも……。

ペコリーヌの思考が暗く沈んだその時。

ぼん、と頭に軽い衝撃が響いた。

ペコリーヌが顔を上げると隣にいたはずの騎士の少年が少し前に出て、彼女の頭に手をのせていた。そのままさすさすと優しく彼女の頭を撫でる。

——また明日、頑張ろう。

ユウキはユイとコッコロがいなくなつてから誰よりも必死に彼女らを探していた。

今日だつてそうだ。王女としての仕事があつたため昼過ぎから合流した。ペコリーヌと違い、早朝から日没まで休むことなく街中を駆けずり回つたユウキはクタクタに疲れ切っているはず。

それにも関わらず、落ち込んだペコリーヌを慰める手つきはどこまでも優しく温かい。この人が一緒にいるなら、きつと大丈夫だろう。そんな何の根拠もない自信が湧いてくる。

「はい!! 落ち込んでなんかいられません! コツコロちゃんがいつ戻ってきてもいいように、美味しいご飯をたくさん作っておかないといけませんしねっ!!」

いつもの調子に戻ったペコリーヌを見てユウキも微笑んだ。

——ぜんぶ食べちゃダメだからね?

「さ、さすがにたべませんよ……全部は。ちよつとだけ、半分くらいはいいかななんて思っちゃってますけど」

そんな何でもないやり取りをしながら歩いていると美食殿のギルドハウスが見えてくる。

見慣れた建物の前には一つの人影が立っていた。

暗く日の落ちた街中ではその顔まではわからなかったが、その背格好は二人の見慣れたものだった。人影はこちらを向いたかと思うとずんずんと近づいてくる。

やがてその顔が判別できるまで近づくと人影——キヤルはペコリーヌの肩を勢いよく掴むとガクガクと強く揺さぶり始めた。

「こんのアホリーヌツ!! それにユウキも!! どこほつつき歩いてたのよ!!」

「わわっ、キヤルちゃん? お、遅くなつてすみません。そんなにお腹空いちやいましたか?」

「あたしをあんたと一緒にすんな!! お腹が空いた程度どうつてことないわよ!! そりゃあ多少は空いたけど……
て、んなことどうでもいいの!!」

ふー、とひとしきり怒鳴ったあとで呼吸を整えるとキヤルはまた叫んだ。

その声に隠し切れない喜色を込めて。

「帰ってきたのよっ、コロ助が!!」



「みなさま、大変ご心配をおかけいたしました。コッコロただいま戻りましてございます」

ギルドハウスの椅子にちよこん、と腰かけたコッコロの姿はそこにいた面々が拍子抜けするほどにいつも通りだった。

いなくなつた日に着ていた儀装束も含め、その体には汚れや傷一つ見当たらない。扉をぶち壊さん勢いで飛び込んできたペコリーヌを見ても動じる様子もなかった。

「コ、コッコロちゃん!? 無事なんですか? どこか怪我したりとかしてませんか?」

「落ち着いてくださいペコリーヌさま。コッコロは健勝そのものにございます」

「そ、それならいいんですけど……」

ペコリーヌはコッコロの全身を隈なく見たり触るなどしてその体に異常がないことを確認するとようやく一息ついた。

「ほんつと心配したんだから!!」

キヤルも安心で胸を撫でおろしている。

「ねえ、コッコロさん……確かにその、無事なのは良かったのだけど……いったいなにがあつたのかしら?」

「一か月もいなくなるなんて……なにか普通じゃないことがあったのよね？ それとユイさんのことも……」
「そ、そうよ！ ちゃんんと説明しなさいよね、コ口助!!」

コツココロの隣の椅子に腰かけていたシエフィが疑問をなげかけ、キヤルがそれに追従した。

それは当然の疑問だった。

この一か月どこでなにをしていたのか。

いなくなったのは誰かに連れ去られたからなのか、それとも自分の意思なのか。

連れ去られたのではないならなぜ戻ってこなかったのか。

一緒にいたはずのユイはどうしているのか。

その場にいた全員の視線が改めてコツココロに向けられる。

それを事も無げに受け止めコツココロは全員に席に着くように促した。

「ええ、もちろんでございます。とりあえずお茶を入れさせていただきましたので、飲みながらゆっくりお話しいたします。ふふ、この一か月何があったのか……」

コツココロは机の上のティーポットに手を伸ばすと全員分のお茶を淹れ椅子の前に置いた。

コツココロの招きにしたがい、各々が椅子に座りティーカップに手を伸ばす。

一か月振りに飲むコツココロのお茶からは嗅いだことない独特な香りがした。この辺りではないどこか遠方で

手に入れた茶葉なのだろうか？

全員がお茶を口にしたのを満足げに眺めると、コツコロはゆつくりと喋り始めた。

「そうでございますね、あれは一月前のことでした。わたくしはユイさまに付き添ってもらい精霊魔法を安定させるべくランドソルの郊外へと……」

しかしなぜだろうか。

喋るコツコロの声はやたらと遠く感じる。

まるで水の底にいるかのような――。

ペコリーヌが自身の身体の異常を感じた時にはもはや手遅れだった。

ぐにやりと視界が歪み臉が重くなる。

歪んだ視界の端で仲間たちもまた力なく倒れ込んでいるのが見えた。

遠くなっていく意識。

ペコリーヌの閉じゆく瞳が最後に捉えたのは、三日月のように不気味に弧を描いて笑う女の姿だった。



「皆さまに飲んでいただいたお茶にはとある薬草が入っておりまして……。本来はエルフの里に伝わる精霊や神といった存在と交信する際にあえて自らの意識を混濁させより自らをより交信しやすい状態にするために用いる薬草なのでございますが……。少々量を多めに煎じると魔物も昏倒させる強力な眠り薬になるのでございます。ドラゴン族のシエフィさまに効くかはやや不安だったのでございますが……。ふふ、よくお眠りになられたようで何よりでございます」

ペコリーヌたちが意識を取り戻したとき、そこは美食殿のギルドハウスではなかった。

薄暗い部屋の中には窓らしきものが見当たらず、赤い金属製の扉が一つあるのを除いて四方の壁にはレンガが敷き詰められていた。

その殺風景な部屋の天井から伸びた縄のようなもので、ペコリーヌとキヤルとシエフィは腕を拘束されていた。

全身の衣服は脱がされて胸や股などの秘部が晒されているが、隠そうにも拘束された腕ではそれも叶わない。

この異常な状態において、唯一拘束されることなく平然としゃべり続けるコッコロ……。信じたくはないが彼女がこの事態を作り出したとみて間違いなかった。

「コ、コッコロちゃん……？ これはいったい、どういう……っ？」

「どういうつもりよコロ助ッ!? このっ、縄ほどきなさいよっ!!」

「コッコロさん……っ」

「ああ、落ち着いてくださいますし皆さま。わたくしはただ皆さまに落ち着いて話を聞いてもらいたいですの……」

「こんなことされて落ち着けるわけないでしょうが……っ!!」

憤り声を荒げるキヤルを前にしてもコッコロはなんら動揺をみせることなく。

それどころかまるで駄々をこねる子供に手を焼く母親のような目でキヤルを見ていた。

「わたくしも皆さまにこのようなことをするのはたいへん心苦しいのですが……皆さまの魅力を理解していただくには仕方がないことなのです」

「皆さま……？ そういえばユウキのやつはどこに——」

「キヤルさま、わたくしの皆さまはユウキ……さまではございません。あれは言うならばそう、元・皆さまでございませす」

「は？ あんた何言ってるのよ？」

「ふふ、すぐに理解していただけますよ。わたくしの本当のまさまについて♡」

ことここに至って全員が確信した。

この一月月コッコロの身に非常に不味いことが起きたのだと。

コッコロのユウキに対する敬愛つぶりはコッコロのことを知るものであれば誰でも知っている。ある種の依存とも言えるほどの過剰な忠誠心にキヤルが呆れを見せたのも一度や二度ではない。

そのコッコロがユウキではない別の誰かをまさまと呼ぶ——そのありえないことを引き起こした何者かが今、美食殿を襲っている事態の原因に違いない。

なんとかさせねばならない——そんな義憤に駆られる美食殿の仲間たちを尻目にコッコロはおもむろに空中に手を翳すと、その手のひらからポウつと光が放たれた。ピンク色の妖しい光の粒はやがて空中で固まるように集まっていき、やがてコッコロの掌の上で形を成した。

それはなにかの紋様のようだった。

ハートや茨のような意匠が施されたそれはなんとも禍々しく妖しい光を放っており、魔術に造詣の深くないペコリーヌやシェフィであってもそれが碌な代物ではないという確信を持った。

「こちらは『淫紋』というまさまが編み出した魔法……をわたくしの精霊魔法で疑似的に再現したものでござ

います。主な効果は性感や性欲の増幅なのですが、副次的な効果として付与した相手に自身が経験した感覚を追体験させることができるのでございます。このようなすばらしい魔法を生み出してしまおうとは……ふふ、さすがは主さまでございます」

「や、やめなさいっ!! そんな呪い染みた魔法、人に使ったらっ!!」

「コッコロちゃんっ、ダメですっ!!」

「コッコロさんっ、お願いやめてっ!! 大切な仲間になんっ!!」

「大切だからこそ、でございますよシエフィさま。さてまずは……ペコリーヌさまとキヤルさまからにいたしましょう。シエフィさまはそのあとでございます。少々お待ちくださいませいませ」

制止する声に耳を傾けずコッコロが三人に近づく。

そしてコッコロの手がびとりとキヤルとペコリーヌの下腹部に触れた瞬間――。

「ふあっ、ひあああああっ……!! ♡」

絶叫が二つ、部屋に轟いた。

バチバチと焼き付くような音を立て、光が二人の下腹部に紋様を刻みこんでいく。仲間が仲間を齧るような痛ましい光景にシエフィは目を瞑った。

「はあ……♡ はあ……♡」

「んう……あ……あ……♡」

やがて声が収まったとき、二人の下腹部にはコツコロのいう淫紋とやらがくつきりと浮かんでいた。ペコリーヌとキヤルは熱の籠った吐息を吐きながら、虚ろな視線を宙に漂わせている。

露わになった二人の秘裂からはとろとろと粘り気の強い液体が流れ股を伝っていた。見るからに正常な状態ではない。これが淫紋の効果なのだろうか？

すつ、と近づいてきたコツコロにシエフィはびくりと肩を震わせた。

「さて、お待ちせいたしましたシエフィさま。次はシエフィさまの番にございます」
「あ……ああ……そんな」

薄暗い部屋にまた一つ絶叫が響くのは、ほんのすぐ後のことだった。



こほん、聞こえておりますか、皆さま？

ふふ、しつかりと聞こえておられるようでございますね。
淫紋の効果が出ているようで何よりでございます。

それでは改めてお話させていただきますでしょうか。わたくしがこの一か月どう過ごしていたのか……。

わたくしは一月前のあの日、まだ安定しない精霊を扱うためにユイさまに無理を言つて儀装束で精霊魔法の修練に付き添つていただいていました。精霊の暴走……あのようなことがありましたから、美食殿の皆さまに心配をお掛けせぬよう内密に、人気のないランドソルの郊外で。その帰り道でございました。わたくしたちが主さまにお会いしたのは……。

ああ、主さまといつても元・主さまのことではございませんよ？ わたくしがお仕えるべき本当の主さま……
わたくしが真に生涯を捧げるお方になります♡

その方はわたくし共の帰路を塞ぐように立つておりました。

わたくし共を頭からつま先まで舐めるように見つめられたかと思うと、

『上玉みくつけ！ しかも二匹。へへっ、今日はツいてんなあ！』

と笑いながらおっしやりました。

まるで動物か何かを寸評するような言葉……わたくしとユイさまは眉を顰めました。なんと下品で粗野な方だろうと。

わたくしは何があっても対処できるように短剣を握る手に力を込めました。隣を見ればユイさまもいつでも魔法を放てるように杖を構えておりました。

『そんな睨まないでよ、ちょっとこれ見てもらうだけだからさあ』

おどけたように笑いながらその方は懐から何かを取り出したかと思うとそれをぶらりとわたくし共の前に垂らしました。

それは穴の開いた丸い金属の輪に糸を通しただけの簡単なつくりの振り子でございました。

催眠術……というのでしょうか。

以前、町中で見かけた見世物小屋でそういう類の道具を用いた芸を見たことがあります。

相手の意思を捻じ曲げ、言いたくないことを言わせたり、思う様に動かしたりすることができるそうでございますね。

とはいえ所詮は見世物。わたくしが見たものも魔力を用いるような実際に効果のあるものではなく、実際にその効果のほどは疑わしいと言わざるを得ず。たつた今日の前でそれと同じことをしようとしている方を見て

も警戒よりも困惑が勝ってしまいました。

明確にこちらに危害を加えようとしているのであれば返り討ちにし王宮騎士団の方に引き渡せば済むのでございませうが、その方がしていることと言えはただ子供が作ったような簡素な振り子を揺らしているだけ。こちらから攻撃を加えるのも戸惑われるような、はつきり言ってしまうえば滑稽な姿でございました。

——だから油断してしまったのでございます。

面白味もなくなったただ等速で左右に揺れ続ける振り子……。

なにもせずそれを眺めているうちに、わたくしたちは自分たちでも気づかぬうちに意識が遠のいていっておりました。

気が付いた時にはわたくしたちの身体からは力が抜け、硬く握りしめていたはずの短剣はガタリと音を立て地に落ちておりました。

身動き一つ取れぬわたくしたちを満足げに眺めて

『じゃ、とりあえず家まで付いてきてもらおっかな』

……そこから先については、もうお分かりでございませうね？

ふふ、先ほどから繰り返し繰り返しお見せしておりますからね。

主さまとわたくしが初めて結ばれた日のこと♡

主さまは元・主さまとは違い、大変に野性的な方でございますして……お会いしたその日のうちに、わたくしとユイさまは揃って貞操を奪われてしまったのでございます。今にして思えば捧げさせていただいたという方が正しいのでしょうか♡

『ああ……やめて、くださいまし……どうか……そこは主さまだけの……あ、あああああつ!! ♡』

……むう、かつての至らぬ己の姿をお見せするというのは思いのほか恥ずかしいものでございますね。

わたくしの身体は全身の穴から毛の一本に至るまですべからく主さまに快樂を得ていただくためにあるというのに。それを拒むなどんでもないことでございます。

ああ皆さま、どうか誤解しないでくださいまし。今のわたくしは主さまに身を捧げること一片の躊躇もございません。

主さまに総身を以てご奉仕することこそ、女の身に与えられた至上の快樂……雌の悦びであるとしかと理解しておりますゆえ♡

『んひいつ♡ お。あつ♡ なかつ、みちみちって広がって♡ しゅごつ♡ だめつ、だめでございますつ♡
そこ、つきあげるのつ、だめ♡ ん、ひいつ!?! ♡』

——ですが初めての身であっても乱れ喘ぎ、その様で主さまに楽しんでいただいたのは幸いですね。

見えておりますか、わたくしのおまんこが主さまの太くて遅しいモノを啜えこんでいる様子が。

♡

じゅっぽじゅっぽと淫らな音がたつほどに愛液を吹き零して……まるでお漏らしのよう。なんてはしたない

ふふ、口では拒むようなことを言っておりましたが身体の方はとくに認めていたのでございます。
今まぐわっている殿方こそ、わたくしが生涯すべてを捧げるべき本当の主さまであると。

ん……申し訳ございません。

わたくし自身思い出すだけでも股が熱く濡れてきてしまいました♡

記憶の中の主さまに犯されているわたくしが羨ましい……。

ふふ、記憶の中の自分に嫉妬するなどおかしな話でございますね。

こほん、続けるといたしましょう。

『れろ……んちゅ……ちゅるっ……じゅぶぶ♡♡』

これは……主さまがわたくしに口淫を命じられた時の記憶にございますね。

主さまにお仕える以上、求められれば口や手を用いたご奉仕も当然のことにございます。

主さまの尊いお子種がたつぷりと詰まった袋を手でさわさわと刺激しながら、舌で硬く張り詰めた肉棒全体

を舐り上げる……基本中の基本でございますね。

顔の間近でおチンポさまにご奉仕していると否が応にもその威容に感服せざるを得ません。

その圧倒的な大きさ、太さ、硬さ……。

張り出したカリがゴリゴリと鬩を掘削するときの圧倒的なまでの快楽をわたくしは身をもって知っております。

まさしく女殺しの凶器。

雌を征服するにこれ以上ないと確信してしまうほどの完璧な雄つぶり。何度見ても惚れ惚れしてしまいます

♡

……以前元・主さまのものもお風呂でお見かけしましたが、主さまと比べてしまうとなんとまあ……ふふ、思わず笑いが込み出てしまいました。あれではとても女を満足させることなどできないでしょう。あんなのに純潔を捧げてしまったユイさまが不憫でなりません。

『あ、主さまあ……いかがでございますか？ コツコロめの奉仕は……ちゆぶ、ちゆるっ』

おや、この時はもう主さまのことを主さまとお呼びしていますね？

主さまをいつから主さまとお呼びするようになったのかはあまり記憶が定かではないのですが……こうして見るとあまり時間はかからなかったようでございますね。まあ当然と言えば当然のことでございます。な

んといつても主さまはわたくしの主さまなのですから♡

『んちゆう……ああ♡ 主さま……主さまのおちんぼさま……れるっ、ちゅぱ……こんなことだめなのに……みなさまの元に帰らないといけないのに……ああ……美味しい……♡ 主さまのおちんぼさまから、ちゅぱ、離れられない……あむっ、じゅぶじゅるっ、じゅぞぞぞ……♡』

主さまのおちんぼさまとそのザーメンのお味はわたくしども雌奴隷にとってまさしく天上の甘露というに相応しく。

これまで美食殿の活動として多くの美食を味わってまいりましたが、そのどれもが色褪せてしまうほどでございます。

一度味わってしまったえば、きつと皆さま病みつきになること間違いなしでございます。
ふふ、ペコリーヌさま、その際はどうか他の方の分は残しておいてくださいませね♡

『主さまあ……コッコロにお慈悲をくださいませ♡ 主さまのおちんぼさまを求めてはしたなくおまんこを濡らすコッコロめにどうかお慈悲をお……♡』

ああ、もう完全に主さまの虜となっておりますね。

見てくださいますし、みつともなく舌を出しながら股を開くコッコロの姿を♡

恥も外聞もなく、ただ主さまにいただけるお慈悲を乞うために躊躇なく股を割り開く……それが主さまにお仕えする雌奴隷としての正しい姿でございます

『おゝあつ♡ はいって、はいつてきましたつ♡ あるじさまのおちんぼさまつ、奥までどいております♡
おゝおおつ？ おちんぼさまつ、すごつ♡ おゝつ、おゝおゝつ♡ おちんぼさまあつ、きもちいいですつ♡
おゝあゝあつ♡ おゝつおゝおおおゝつ♡』

ふふ、まるで獣でございますね。

わたくし、自分があんな汚い声を出せると主さまと交わつて初めて知りました。

見てくださいますし、わたくしのあの顔を。とっても幸せそうでございますでしょうか？

あれこそが主さまの雌の悦びを与えていただいたこの世で最も幸せな女の顔でございます。

『んおおおつ♡ ああつ、あるじさまあつ♡ コツコロは、もういつてしまいますつ♡ んおゝつ♡ あるじさま、あるじさまもどうかコツコロの中で果ててくださいませつ♡ コツコロの一番奥つ、し、子宮に、あるじさまのお子種つ、ザーメンつ、存分に吐き出してくださいませえつ♡ おゝおゝおゝゝゝつ♡ ああるじさまつ、あるじさまあつ♡♡♡』

……♡

『はひい♡ 子宮でっ、あるじさまのザーメンがあげれておりますう♡ きもちいい……きもちいいです、あるじさまあ♡ ああ、あるじさま、愛しております♡ コツコロはあ……この世の誰よりもあるじさまをお慕い申しております♡ あるじさまっ、あるじさまあっ♡』

……っ、……っ♡

ん、はあ……♡

……ああ申し訳ございません。

主さまの精を身体の奥で吐き出していただくその感覚を思い出すと……んっ、それだけ軽く達してしまいました。

これがわたくしたちが過ごした一月……その顛末の一部にございます。いかがでございますか？

……ふふ、お伺いするまでもないようですね。皆さま揃って主さまにご奉仕するときのわたくしと同じ顔をなざっておりますよ♡

さて、そろそろ仕上げと参りましょう♡



「はあ……♡ はあ……♡」

「んっ……ああ……♡」

「……っ♡ コツコロ、ちゃん……」

コツコロが淫紋を介して送り込んだ映像。

およそ一か月の及ぶ性に満ちた時間を淫紋で発情させられながら強制的に追体験させられた三人の様子はそれはひどいものだった。

陶然とした瞳は焦点も定まらず虚空を見つめ、口からは熱い吐息が零れる。

隠すものなく晒された秘穴からは洪水のように愛液が零れ、足元に水たまりを作っていた。

特にキヤルとシエフィはもはや意識があるのかも怪しい有様。

ペコリーヌだけはなんとか意識を保っているようだが、コツコロの名を呼ぶので精一杯のようだった。

「ですがやはり記憶だけでは物足りのうございますか……」

ゆらりと身体を揺らし、コッコロが近づいてくる。

「淫紋から直接わたくしが主さまのご寵愛をいただいているときの感覚を流し込めば、きっとわかっていたで
けるでしょう……主さまにお仕えることがいかに素晴らしいことであるか……ね、キヤルさま」

「あ……コロ助……だめっ……だめ……やめて……わすれたくないのっ……あたし、あたしはあいつのことがっ」
キヤルの下腹部……そこに突き出た淫紋に触れたコッコロはにつこりとほほ笑んだ。

「だめっ、でございます♡」

「あっ……あああああああーっ♡♡♡」

コッコロがキヤルの淫紋に触れると再び淫紋が光り輝き、薄紫色の閃光をまき散らす。

淫紋から送り込まれる感覚がキヤルの身体に何倍にも増幅されて送り込まれ、五感を埋め尽くす圧倒的な快感にキヤルは耐え切れず絶叫した。

「はへっ♡ あっ♡ ああっ♡」

「いかがでございますか、キヤルさま？ 主さまにお仕える喜び……わかっていただけましたか？」

「あつ♡ ああ♡ はひっ♡ んっひいっ♡」

「……いささか刺激が強かったようでございますね。まあこの様子ではご理解いただけたとみて良いでしょう。さて……」

もはやキヤルは会話できる状態ではない——。
そう判断したコツコロは次なる獲物、シエフィに向き直った。

「あ……コツコロ、さん……。おねがいっ……思い出して……美食殿はコツコロさんにとつて大切な居場所……っ」
「ええ、シエフィさま。美食殿のみなさまはわたくしにとつて大切な方々。だからこそ、わたくしと共に主さまにお仕えしていただきたいのでございます」

「そういう話じゃ……っひあああああつ!! ♡」

キヤルと同じようにシエフィの身を淫紋から送り込まれる絶大な快楽が焼いた。

全身ががくがくと震わせながら、股座から愛液をまき散らす。

全身の水分を絞り出してしまいそうなほどの勢いだったが、それも淫紋の光が落ち着くと同時に徐々に弱くなっていた。

そしてコツコロは顔をシエフィの耳元に顔を近づけ二三言葉を交わすと満足そうに笑った。

「シエフィさまはわたくしとともに主さまにお仕えしていただけるようでございます♡ さて、残るはペコリー

又さまのみでございますね。安心してくださいまし、ペコリーヌさまを一人残すことなどいたしません。わたくしたち全員で主さまにお仕えいたしましょう♡」

ペコリーヌの俯いていて顔は良く見えないが、紅潮した肌や伝う汗の量を見れば淫紋の効果が正しく發揮されているのは間違いない。

今淫紋から直接快樂流し込めば、他の二人のように容易く墮としきることができらう。

その先に待っているのはめくるめく淫蕩の日々。

大切な仲間たちと共に主さまにお仕えする。いついかなるときでも主さまに楽しんでいただけよう淫らな格好に身を包み、身の回りのすべてをお世話させていただき、主さまが催した際には四人で尻を主さまに突き出し並んで犯していただくのだ。

なんと素敵な日々なのだろう。

コツコロはこれから先の未来を夢想し、しばしその空想に浸った。

そしてそれを実現するべく、ペコリーヌに手を伸ばそうとして――。

「――だめ、ですっ!!」

近づいてくるコッコロに対して、ペコリーヌはびしやりと否定の言葉を放った。

先ほどまで俯いていた顔はまっすぐとコッコロに向けられている。

その瞳は淫らに蕩け、身体をもどかしそうにくねらせている。

今この瞬間も淫紋がもたらす淫欲の炎にペコリーヌが苛まれていることは間違いない。

しかし、その瞳から光は失われていない。

何があっても屈してないという強い意志が宿っていた。

「わたしは、ぜったいに負けませんっ……!!」

はつきりとした拒絶の意思を込めてコッコロを見つめるペコリーヌ。

今自分がその衝動に屈してしまえばユウキはどうなる？

キヤルやシエフィ、コッコロは——？

美食殿はなくなってしまうかもしれない。

かつて王宮を追われ居場所を失った自分を温かく包み込んでくれた大切な人たちのいる場所が。

今ここにいないユウキと力を合わせれば、きっとこの危機も切り抜けることができる。みんなでまた温かいご飯を囲むためにも、ここで快樂に屈するわけにはいかなかった。

その様子を見てはあ、とコツコ口は溜息をついた。

「……やはり魔法体系が違うためでしょうか？ わたくしではユイさまのように主さまの魔法の効果を完全に再現することは難しいようでございますね……。ああ、お可哀そうなペコリーヌさま……。わたくしが至らぬせいでどうかしい思いをさせてしまい申し訳ございません。ですが大丈夫でございます。主さまにもしも墮とせきれなかった場合は自分の前に連れてくるようにと承っております。主さまのお手を煩わせるのは従者として恥ずべきではありませんが……。致し方ありません」

「さあ参りましょうペコリーヌさま。わたくしどもの主さまの元へ♡」



拘束を解かれても葉や淫紋の効果でペコリーヌの身体には動かなかつた。

まさまがお好きだからというコツコロに布地の少ない水着のようなものを着せられた上で、ペコリーヌが連れてこられたのは寝室らしき部屋だった。

ピンク色の光源が妖しく照らす室内の中央には5、6人は広々と寝れるサイズのベッドが鎮座している。その上にペコリーヌは横たわされ、再び頭の上で腕を拘束されていた。

「お、コツコロちゃんの方も終わったの？」

やがて部屋に一人の男が入ってきた。

コツコロの記憶の中で見た男に間違いない。

年頃は二十台程度だろうか。背が高く服に覆われていても隆々とした筋肉が目立つ。指輪やピアスを開けており、チャラつたいかにもチンピラといった風体の男。一見すれば魔法や魔道具など使えるようにはみえな
いが、そう油断した結果コツコロたちがどうなってしまったのかはよく知っている。

ペコリーヌは口の端をきゅつと結び、男を睨みつけた。

そんなペコリーヌをよそにコツコロは嬉しそうに男の方に近寄ると男の腕に抱き着き、うつとりと顔を見上げた。

「はい、主さま♡ ……も、ということはいいさまの方も？」

「ユイの方が二時間くらい早かったかな？ ま、軽めに味見は済ませたところだよ」

「それは…遅れてしまい申し訳ありません。その上、ペコリーヌさまに関しては完全に主さまに忠を捧げていただくこと叶わず…」

「ペコリーヌ…って王女様だけ？ ま、そっちの方が人数が多い分難しかっただろうしね。いーよいーよ、それはそれで墮とす楽しみが増えたってもんよ」

「ああ、やはり主さまはお優しいお方♡ それでは不肖コツコロ、主さまのお手伝いをさせていただきますたく思います」

二人はいちやつくカップルのようにびったりと寄り添いながら、ベッドに歩み寄ってきた。

「へー、本当に王女様なのこの子。確かに見覚えあるなあ」

「ええ、紛れもなくこのランドソルの王女。ユースティアナ・フォン・アストラライアさまその人にございます。わたくしどもはペコリーヌさまとお呼びさせていただいておりますが」

しげしげと男がペコリーヌを見つめる。

かつてコッコロとユイに向けられていた女を品定めする下品な目つきがペコリーヌに向けられていた。じろり、じろりと胸や股の間を中心に視線で舐められているかのような感覚がペコリーヌを襲う。

ぞくり、となぜかお腹の奥が疼く。

それを誤魔化すようにペコリーヌは男に向かって声を張り上げた。

「あ、あなたがコッコロちゃんをこんな風にしてしまったんですね……っ。今すぐ魔法を解いて皆を解放してくださいっ！」

威圧するようんペコリーヌの声を聞いても男は顔色一つ変えない。

やがて男はいやらしさの籠った声で笑った。

「ははっ、合格!! 顔は超可愛いしおっぱいもユイと同じくらいでけーしで、まさに俺好みって感じだわ」
「ふふ、ご満足いただけただけでなによりでございます」

男がくいつと顎をしゃくるようにすると、男の意を汲んだコッコロが恭しく男の服を脱がせ始めた。

「やー、さつきユイたちと軽く遊んだけど、今日は一日ユイとコッコロちゃん使えなかつたからさ……まだまだ溜まってるんだよね」

「あ……っ♡」

男が服を脱いだ瞬間、男の肉棒がぶるんと窮屈な場所から解放されて飛び出した。

記憶の中で何度も何度もコッコロを喘がせていた肉棒。

ペコリーヌの視線はそれに釘付けになってしまう。

喉がやたらと渴く。

全身の毛穴から汗が噴き出して、身体の体温がぐんぐんと上がっていくのを感じる。

先ほどまで威勢のいい言葉を放っていた口の端からは涎が零れ、無理矢理開かれた股の間でぐしょ濡れとなった秘裂が番となる男を求めてくぱくぱとあさましい動きを繰り返していた。

淫紋に犯されても保っていた屈さない意思——それが男の肉棒を見ただけで霧散しかかっていた。

コッコロは己が主の素晴らしさを再確認する。

そして微笑みながら、ペコリーヌに寄り添いくちゆりとその秘裂を指で割り開いた。

「さあ主さま……ペコリーヌさまのこちらは準備ができております。

あとは主さまのお慈悲を待つばかり……」

「コツコロ……ちゃん……だめです……こんな……ああ♡」

女が形ばかり発するか弱い否定の言葉。

それがより男の欲望を駆り立てるものだ。彼女は知っているのだろうか？

「はあ……♡ はあ……♡」

（ああ……このままじゃ……お、おちんぼ入っちゃいます♡ 初めてあった人なのに……ユウキくんじゃないのに……♡ ♡ 身体に全然力が入らなくて……ああ……♡）

男がペコリーヌに覆いかぶさりコツコロが割り開いた秘裂に肉棒をあてがってもペコリーヌは抵抗する様子一つ見せない。それどころか熱い吐息を吐きながら、その視線は自身のあてがわれた肉棒に固定されていた。すつかり出来上がったペコリーヌを見て、男はにんまりといやらしく笑う。

「へへっ、それじゃあ王女様のロイヤルまんこ、いただきまーす♡」

「あ、や……やめ……」

じゅぶり、と男の肉棒のその先端が音を立ててペコリーヌの秘裂に沈み込んだ。そして、その瞬間が訪れる。

「ひあっ♡ ふあああああああっ!! ♡♡♡♡」

完全に発情しきった雌肉は突き入れられた肉棒を簡単に受け入れた。膣内の贅が硬い肉棒を歓待しねつとりと絡みつく。

やがて肉棒がペコリーヌの最奥——子宮に辿り着く。

美食殿の仲間たちだけでなくトウインクルウイツシユまでも陥れた憎むべき男の肉棒にペコリーヌの子宮口はちゅっちゅっ♡と愛おし気にキスをしてしまう。

「んう……ふか、いい……っ♡」

——今ならばコッコロの言葉が理解できる。

『ふふ、口では拒むようなことを言っておりましたが身体の方はとっくに認めていたのでございます。今まぐわっている殿方こそ、わたくしが生涯すべてを捧げるべき本当の主さまであると』

この人こそがきつと自分にとって運命の——。

「ちが……う……♡ わたしは、ユウキくんが……♡」

「おーおーまたユウキくんか。モテモテだねえ。そんな男捨ててとつと俺に乗り換えちまえよ」

「……ッ♡ 誰が、あなたになんか……ッ♡」

「ふーん、下の口はこんなに歓迎してくれてんのかなあ」

「ひあああッ!?♡ あっ♡ あひっ♡ だめっ、ぬ、ぬいてくださっ、あっ、あっ、ああっ♡」

ぐちゆりぐちゆりと水音を立てながら、男は腰を打ち付けペコリーヌの膣壁を激しく擦り上げる。

初めて交わる相手への気遣いなど一切感じられない容赦のない突き込みにペコリーヌはたまらず嬌声をあげる。

「ふふ、どうですペコリーヌさま？ 主さまのおちんぼさまのお味は♡」

「あひっ♡ あっ♡ あっ♡ あんッ♡ ふあっ♡ お、おちんぼっ、すごおっ♡ おおっ♡ は、ふ、っ
んっ♡」

男の一方的な抽送に対してもペコリーヌは甘ったるい嬌声をあげ、顔を快楽に歪ませることしかできない。コッコロの言葉の意味も理解できぬまま、自らを犯す男の肉棒を賛美してしまう。

端から見れば無理矢理犯されているとはとても思えない。汗を飛び散らせながらまぐわっている雌雄はともに性交がもたらす快感を享受していた。

「あッ、あッ、あッ♡ そんな強くされたらっ、あんッ♡ お、おまんこっ、こわれちゃいますっ♡ あッ♡
アッ♡ あんッ♡」

「王女様となるとまんこまで優秀なのかね……もう一発出ちまいそうだ……っ」

快樂に霞んでいた思考が男の言葉によって現実に引き戻された。

「だ、だめっ、なかにはださないでくださいっ♡ なかに出されたらっ、あ、あかちゃんができちゃいますっ♡」

「あー、王女様孕ませたらその子が次の王様ってことになんのかね？ やっペマジで興奮してきたっ!! 出すぞっ!! おら、俺のザーメンでお世継ぎ孕んじまえよ、あつつ王女様っ!! ♡」

「ああっ、だめ、だめだめだめっ、だめえっ!! ♡」

懇願も虚しく、男の怒張がペコリーヌの胎内で爆ぜた。

びゆるっ、びゆるるるるっ! ! ! ! !

粘度の高いゼリーのような精液がペコリーヌの膣にどくどくと流し込まれていく。

「あゝひっ、ひあぁ~~~~~ッ! ! ! ! ! ♡ ♡ ♡」

(な、なかあ……♡ びゆるびゆるって男の人の、精液中に出されちゃってますっ♡ だめなのに、わたし王

女なのにつ♡ これ、あつたかくてすぐくシアワセになつちやいますつ♡ ああ、き、気持ちいい♡ 気持ち
 いい♡ 気持ちいい♡)

下腹部の奥に男の精を吐き出され続けるにつれて、ペコリーヌの中にあつた抵抗感が霧散していく。
 こんなに気持ちいいことをなぜ自分は拒んでいたのでだろう？
 そんな疑問が湧いて出てしまうほどに。

「うおつ……やつべえ超出る……王女様に種付けたまんねえ……」

男が感嘆の声を漏らす。

一国の王女を組み敷き、高貴な子宮を自分の精液で思う存分穢す背徳感——。
 単純な肉体的な感覚だけでは得られない精神的な充足感が、男の射精の勢いをより強いものにしていった。

「つああつ♡ うゝあつ♡ これつ、おなか、いっぱいになつちやいます♡ ひああつ♡」

「ははつ、こんなに出了のは久々だわ。よつしや、今日は一晚中王女様のお相手を務めさせてもらおつかなの♡」
 「ああさすがは主さま……なんと逞しい……♡ よかったですね、ペコリーヌさま。今日は一晚中主さまのご
 寵愛を賜れるようでございますよ♡ きつとペコリーヌさまは立派な雌奴隷になれますね♡」

「あつ……そんな、わたし……わたしはあ……♡」

(たすけて……ユウキくん……これ以上されたら、わたしきつともどれなくなってしまうすつ……♡)

己の中で再び硬くなる怒張に恐怖を抱きながらも、たつぷりと精を吐き出されたペコリーヌの秘裂からはじゅん♡と新しい愛液が溢れ出していた。



……それからどれほど時間が経っただろうか。

「……はひっ♡ はあ……はあ……♡」

「ああ……ペコリーヌさま……♡ とても淫らで素敵なた姿でございますよ♡」

ベッドの上には雌の快楽を享受しきった女体が力なく転がっていた。

もはや足に力は入らず、だらりと開かれたままの股の間から夥しい量の精液をこぼこぼと垂れ流す。膣だけではなく全身に精液がこべりついており、雄と雌の性臭がむわりと部屋の中を包み込んでいた。

「もう一度聞かぜ？ 王女様……ユースティアナが愛してるのは誰だ？」

「わたひ……？ ♡ わたひがあいしてるのはあ……♡」

口から零れるのは、普段の快活な彼女からは想像もつかない媚びた声。

「えへえっ♡ あなたあ……あなたです♡ わたしが、ユースティアナ・フォン・アストライアが愛しているのはあ……あなたですう♡」

「ユウキって野郎が好きだったんじゃないのかよ？」

「ゆうきくん……？ あへえ、あれはあ勘違い、でした♡ ユウキくんよりもあなたと、あなたのおちんぼの方がずっとずっと好きです♡ ユウキくんじゃなくてあなたの赤ちゃん産みたいですう♡」

「うはあ熱烈な愛の告白w こりやあ俺もお世継ぎづくり頑張らねえとなあ♡」

「はいっ、つくってください♡ わたしの子宮にどろどろのザーメン流し込んで、ランドソルの新しいお世継ぎ、産ませてください♡」

「ああ……なんと羨ましい♡ 主さま、どうかわたくしにも主さまのお慈悲をお恵みください……わたくしにも主さまのお子を授けてくださいませ♡」

「ははっ、じゃあ次はコッコロちゃんだな。そっちで尻向けろ。ユースティアナはちよつと休んでな。」

「あ……は、ひい……♡」

「はい、主さま♡」

ずるり、と男の肉棒が抜かれるとペコリーヌの身体は支えを失い力なくベッドに沈み込む。

沈みゆく意識の中、ペコリーヌの脳裏に騎士の少年の姿がよぎる。

(さようなら、ユウキくん……わたしが好きだったひと……)

だがそれもやがて霞むように消えゆき、やがては思い出せなくなつた。

完堕ち済みのコッコロが美食殿の仲間を墮とす話

発行日 2023年12月31日

著者 ユメジダケ
<https://www.pixiv.net/member.php?id=17058402>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
